

## 【資料】

## 現代の父親像(1)

— 父親に対する調査データを手がかりとして(注1) —

手がかりとして(注1) —

高橋 宗

はじめに

最近の子ども社会における諸問題は、多種多様な現象を示している。とくに教育現場における問題は深刻であり、社会問題として取り上げられている。これらの現象に対する対策が効果的に行なわれているかは別問題として、その現象の実態把握と原因追求はいろいろな視点から行なわれている。しかし、ここにおいて改めて考えなければならぬことは、子どもの人格を形成する条件として、家庭環境が基本的なウェイトを占めているということである。むしろ家庭環境そのものが子ども社会のあり方を変えているとも考えることができるであろう。

子どもの発達に対して親がどのような役割を持っているかについては、親子関係の研究として取り上げられている。親子関

係の研究の目的について小嶋は「どのような親子関係を持ってきた子どもは、どのような人格を持つようになるかを明らかにするもので、人格に対する環境的要因の影響を検討するものである」と述べている(小嶋1962)。さらに、そこでの中心的な課題は、先行変数としての親の養育態度や行動の諸特徴と、後続変数としての子どものパーソナリティや心理社会的適応との間の因果的關係を明らかにすることである(小嶋1965, 1970)。このように、子どもに対する親の養育態度や行動の研究は、①親の自己認知、②子どもによる認知、あるいは、③第三者による認知のいずれかに基づいて測定され、そのデータに因子分析等の数量的検討が加えられるのがほとんどである。その結果、親子間を測定するインヴェントリーの研究(小嶋1970)へと展開され、その方法論的問題はほぼ確立されたといえる。このような親子関係研究の流れの中で、かつて筆者も母と子の心理的つながりがどのような関係にあるかを調べるために、母親の自己認知による調査を実施し、因子構造の分析を試みた(高橋1977)。しかしながら、家庭内における子ども環境は母親によるそればかりではない。父親の影響は大きいものであるが、一般的には二次的なものとしてとらえられやすい。しかし、家庭における子育ては、社会情勢の変化によって「母親中心」といった従来のあり方から、父親をも含めた「共にやる」方向に進んでできているとみることが出来る。このような流れの中で、父親たちが子育てをどのように考え、またどのようにそ

れに対応しようとしているのが、注目され出して来ている。ただし、そのような父親の育児姿勢を検討する研究の多くは、調査研究が主のようなのである。たとえば「子どもの側の評価から見れば、父親の権威失墜はない」(深谷1983)。「働く父親の姿を見ることが少ないことが父親に対する感情や評価として決まるわけでもない」(名越1981)。または、「共働きの家庭における父親の育児行動をみると、父親にとって子どもがめずらしい存在である間は育児参加率が高まる」(木田1980, 1981)。といったこれらの報告は、調査研究の例である。しかし、この種の調査研究について得られたデータが、父親の実際の態度や行動と関連をもたない可能性があるといった指摘がされる。そして、そのような可能性を防ぐために、父親が子どもに対してどのような役割をもつべきかといった研究においても、理論的、方法的の枠組みをもった実証的研究を進めるよう提言されている(小嶋1970b, 1983)。このような考え方によれば調査データによって得られた結が、必ずしも父親の態度を表わしていると言えないかもしれない。なぜなら、父親の認知の枠組みがどうであるかによって、その調査データの結果は、親の養育に対する実際の態度や行動の反映でありうると同時に、それはまた、父親自身の内部的諸要因の反映でもありうると思われるからである。更に、調査などで行なう質問紙に対する反応は、その質問紙の項目内容だけでなく、個人的反応のありかたによって大きく影響されることが多いといった問題点を持っている(小

嶋1970b)。このような問題はおよそ調査研究というものにつきまとう大きな課題でもある。それゆえにこそ論理的な実証研究が求められるのであろう。

ただこのように考えていくと、実態調査的研究は、親子関係を論ずるのには不適切なように考えられてしまいがちだが、すべてがそうかどうかということはできない。問題は、焦点のあて方と結果のとりあつかい方に存するのではないだろうか。父親に対する意識構造によるアンケート調査の結果をもとに、現実社会における父親の養育行動を予測することも可能である。子ども環境条件に父親の行動がどのような影響を与えているのか、父と子の関係をどのように捉えていったらよいか、といった問題提起という意味に限定して考えるなら、調査研究が十分にその価値をもっているといえる。したがって、今回は、私の研究を、父親と子どもの関係を明らかにする基礎的段階と位置づけ、そのための基礎的データを収集することに重点を置いた。

父親の役割について考える時、社会的変化を考える必要がある。農耕時代の労働状況から工場中心といった工業化社会への変化は、父親と母親の役割を明確に分業化することになった。工場が求める労働力は父親を家から難し、家庭生活に対する経済面での供給者へと変えていった。それによって、父親は子ども身近にすることがなくなり、父親の本当の姿は「見えない」(invisible father)状態になった。父親は物理的、空間的に不在だけでなく、それ以上に精神的にも不在になってしまっ

たのである(山村1983)。それとは逆に母親は、家において家事や子育ての中心者となり、ますます母子関係の偏重という形態ができあがっていった。このために、しだいに父親は、子育てや教育に積極的な参加をしなくなってしまったといえる。このように父親は実社会、母親は家庭といった労働形態が進む中で、子どもに対する役割も分業化し、固定化されてしまった。しかしながら、敗戦による家族制度を含む価値体系の崩壊と家庭生活での平等化といった時代の変化は、母親を家庭の中の人だけとめておくことをしなかった。すなわち女性も、家庭の中で得ることが出来なかった自己実現の機会を社会の中に求めるようになってきたのである。そのような女性の社会進出によって、母親の中にも共働きをしながら子育てをする者が多くなってきた。それは、単なる収入の増加を願うだけではなく、社会参加を通して人間としての自己実現を達成することでもあった。このような社会状況の中で、「子ぼんのうパパ」といった言葉で否定的な意味に表現されるように(松田1974)、最近若い父親が再び、子育てや教育に少しずつ参加しはじめてきたのだと言える。

今回の調査は、このような社会背景の中で現代の父親が子育てについてどのように考えているのか、また、子どもとのかわりを実際にどのように見ているのか、といった父親の育児姿勢を概観する。その中で、父親の育児に対する役割、位置づけといったものについて考えてみることを目的とした。特に、父

親の年令層をば広くするために乳児期から青年期(前期)までを調査対象とした。そして、まず父親が考える「子育てに望ましい父親像」を浮き彫りにし、次に「父と子のコミュニケーション」が、どのような状況にあるのかを知ろうとする。また、深谷(1983)が示すように、父親の権威が家庭内において依然として存在しているのか、また、そうした権威の存在と現在の子ども社会とはどのような関係にあるのか、そのような点を調査結果に基づいて考察し、現代の父親像を明らかにしてみた。

#### 方 法

〔調査対象〕 大津市唐崎学区の保、幼、少、中学校に通う子どもたちの父親。調査用紙の配布数は2282枚。回収数は1838枚。回収率80.54%のうち有効処理データ数(標本数)は、1768件(77.47%)で分析処理が行なわれた。

〔調査内容〕 調査項目は37。その内6項目は、生活環境を問うフェイスシートである。

〔調査手続〕 調査は、昭和60年12月に実施された。調査用紙は、校園の子どもたちを通して、父親に配布。本人記入後、封筒に入れ校園を通して回収。兄弟姉妹のある場合は、そのいずれかひとりについて記入し回答する方法をとった。

〔分析方法〕 調査資料を①子どもの年齢、②父親タイプ、③権威の低下、といった三つの側面を中心に分析を行なった。この分析における三つの側面とは次の通りである。

- ①子どもの年齢 (ア)保育園児、幼稚園児を乳児期、(イ)小学1年  
 3年生を児童期前期、(ウ)小学4～6年生を児童期後期、(エ)中  
 学生を青年期前期と考えて分割し、比較検討を試みた。
- ②父親のタイプ 調査項目の「子育てに望ましい父親のタイプ」  
 における三群 (A、仕事か家庭か、B、厳格型か友人型か、C、  
 自由か服従か) について比較した。
- ③権威の低下 調査項目の父親の権威が高いか低いかによって  
 二群に分割し、比較した。すなわち、親の権威が低下している  
 と非常に思っている人 (権威喪失型) と、まったく思っていない  
 人 (権威維持型) に分けて検討した。

### 結果と考察

各質問項目への解答を分析し、それらの特徴をまとめると、  
 次のようなことが明らかにになった<sup>(注2)</sup>。

#### 〔1〕生活環境

調査対象になった父親の年齢は、30～49才の人が92%で、35  
 ～45才が中心になっている。仕事は、30分から1時間で通勤す  
 るサラリーマンが多い。家族は、全体の80%が親と子の核家族  
 世帯である。子どもの数は2人が60.9%、3人が25.4%である。  
 幼少期には幼稚園経験を大半 (71.7%) が持っている。

#### 〔2〕父親の存在意義

現在の子ども社会の状況を見た時、「昔に比べて変化してき  
 ているか」といったことについて、全体の92%の父親が変化し

ていることを認めている。この傾向は、児童期後半から青年期  
 前半の子どもを持つ親、すなわち子どもの年齢の高い親ほど強  
 く感じている (図1)。このことは、社会情勢の変化が大きい  
 ことを意味するものでもあり、またそれについて行けないと感  
 じつつある父親の姿があることを示しているとも見ることができ  
 る。

このような子ども社会に対する認知の中で父親自身の権威に  
 ついてはどのように考えているであろう。図2に示すごとく  
 「非常に低下している」と思っている人が15%であった。しか  
 し、「少しは低下している」を入れて考えると最近低下してき  
 たと感じている人が過半数 (63%) を越えている。すなわち、  
 父親の権威低下については、半数以上が感じており、権威喪失  
 型が維持型を上回った結果となっている。

父親自身、子どもが「父親のことを誇りに思っていない」と  
 考えているのであろうか。そうではないようである。父親の7  
 割以上が誇りに思ってくれていると解釈している。しかし、そ  
 の思いは、小さい (乳幼児期) 頃は、父親としての自信 (77.5  
 %) としてもっていたのだが、年長 (青年期前期) になるに従っ  
 て減少 (67.5%) する傾向を示している (図3)。さらに権威  
 喪失型の父親は、「誇りに思っていないだろう」と考える人 (33.  
 5%) が、権威維持型の2倍以上を占めている。これは、子ど  
 もが成長するに従って子どもとの関係が十分にとれなくなり、  
 父親としての「自信のなさ」へとつながっているのではないか

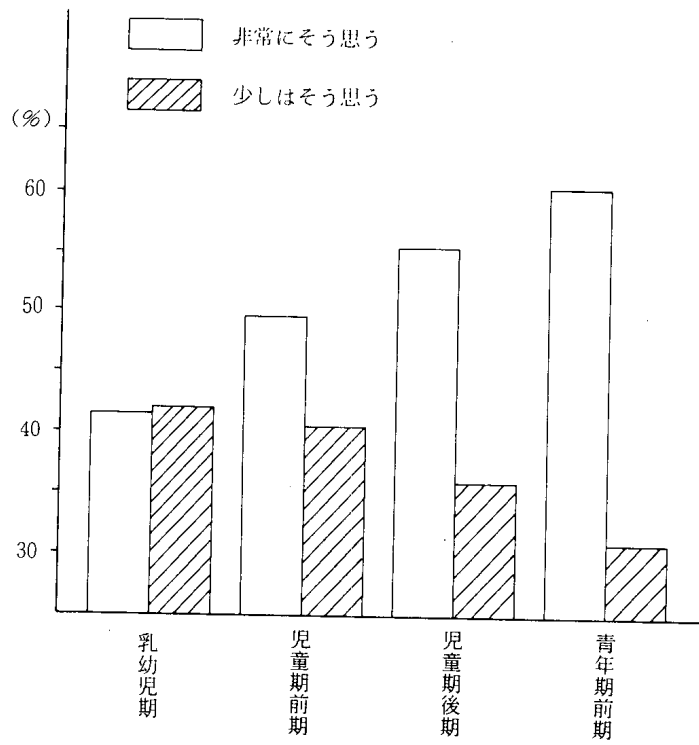


図1 今の子ども社会が変わって来たと考えている傾向

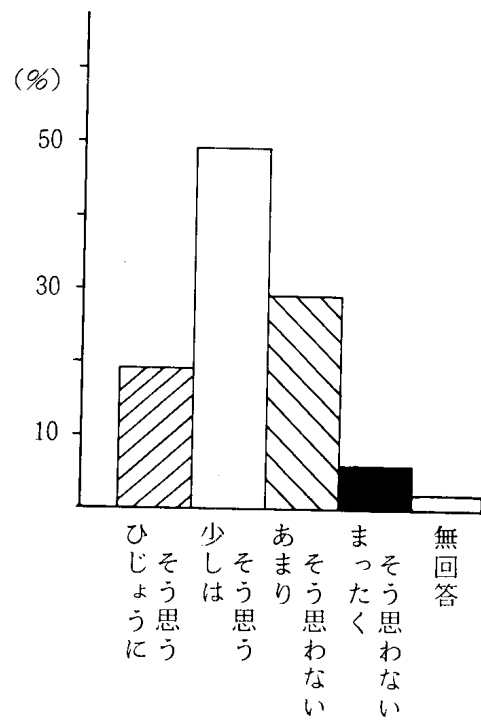


図2 父親の権威が低下して来たたと、父親自身が感じている比率

と考えることが出来るかもしれない。

それでは、「誇りに思える父親像」すなわち、「子育てに望ましい父親のタイプ」についてどのように考えているかを親に求めたのが、図4である。この調査において、父親が考える「望ましいタイプ」として、まず一所懸命働くといった「仕事を大切にする父親」をあげている。そして子どもに対しては、比較的厳しい姿勢をもつ父親として示している。すなわち、仕事型+厳格型のタイプと言う事が出来る。今回の結果を比較する為に、日本およびアメリカの青年が、「理想の父親像」として示したデータ（総理府資料1984）を同様に図に示してみた。それをみると、父親自身のデータと子ども自身のデータといった違いはあるにしても、明らかな違いが見られる。特にアメリカの青年が描く父親のタイプとは、対象的な位置関係にあるといえる。これは、文化差の要因が入っているとも考えられるが、日本とアメリカの子ども達も望んでいる父親像と父親自身との考え方の違いを明らかにしており、その間のギャップが問題として示されているのではないだろうか。さらにこれらの結果は、親の年齢が高くなる程「仕事型で厳格型」といった傾向を示しやすかった。すなわち年輩の父はそれでほど、仕事が忙しく、それが生活の中心になりやすいことを示し、子どもに対しては、父親自身の意見を主張し従わせる傾向が多いことを示している。これは、いわゆる古典的な父親タイプのイメージが示されているとも考えることができる。従って、家の仕事を手伝う父親は

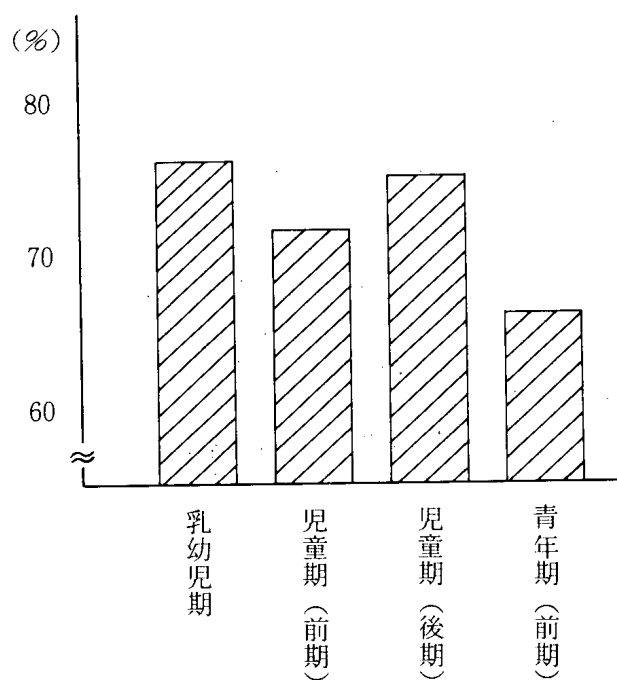


図3 「子どもが父親のことを誇りに思っている」と考える父親の傾向

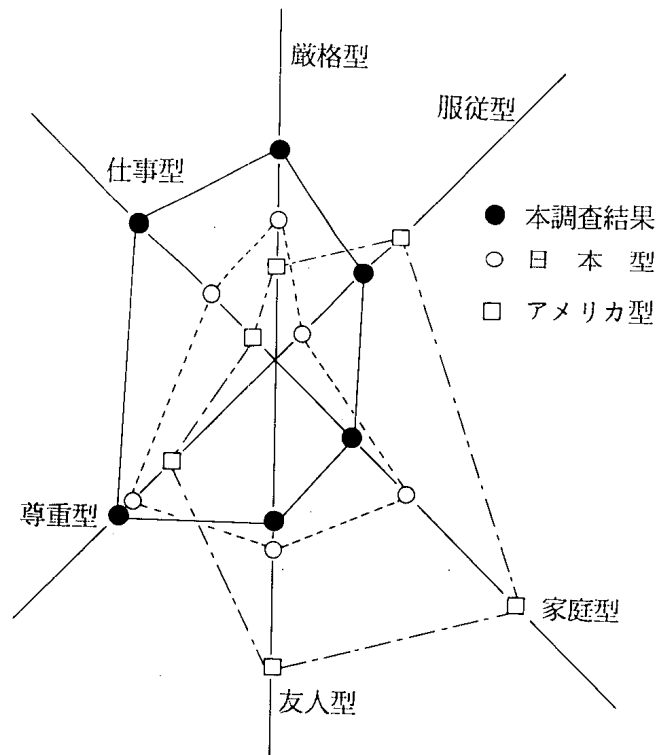


図4 「子どもにとって望ましいと考える父親のタイプ」についての比較

少なく、8割近くが非協力型になってしまっている。しかし、家族内での相談事の決定権についてみると(図5)半数近くがみんなでの民主型。それに対して、父親自身によっていつも決定される場合は5%程で非常に少ない。しかしある程度父親によって決定されるだろうと考えているのが3割となっている。この傾向は子どもに対する姿勢が厳格型である人ほど父親自身で決める(41.9%)場合が多く、友人型ではそれが少なくなり(28.9%)民主型の傾向がはっきりしている。このように考えると昔のように「お父さんに聞いてから」といったスタイルは少なくなり、話し合いによる解決や決定が定着しつつあるといえるかもしれない。

しかし一方では、子どもや妻だけで決める(16.9%)といった父親不在のパターンが、父親自身で決める場合よりも多くを占めていることが注目される。これは、家庭内での父親の存在がうすくなり、それを父親が感じ出していることのあるあらわれかもしれない。また、自分の仕事を子どもにさせたいと思う父は、わずか3.7%であり、ほとんどの父親が別の仕事をさせたいとも考えている。このように考えてくると、家庭内での父親の存在も、やや不安定なものになってくるように思われる。

〔3〕父親が考える「子どもが求める父親イメージ」

子どもたちは、「どのような父親であることを望んでいると思うか」と聞いてみたのか、図6である。この図では父親の四タイプで比較した。それによると、各タイプによってその特性

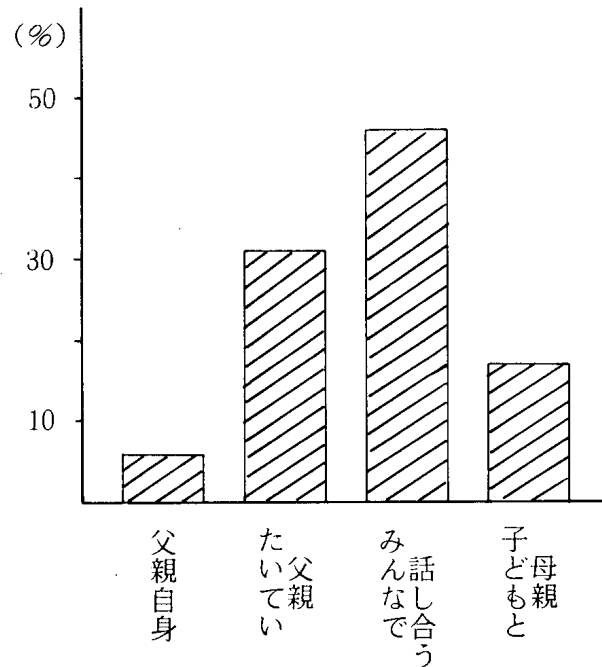


図5 家庭内で相談事をする時の決定権の傾向

がよく示されていることが判る。しかしこれらの特性は「仕事」や「家庭」といった要因よりも、父親の姿勢を示す「厳しさ」や「友人」といった要因によって特徴づけられるようである。すなわち、子どもに対して厳しい父と友人のような父といった違いによる差と考えられる。この二つのタイプの父親は、この図でも判るように、まず仕事熱心であり、年輩になるほどその傾向は強くなっている。ところが「厳しさ」と「優しさ」といった側面では、二つのタイプに明らかな違いが見られる。友人のような父親は「優しさ」というイメージを強く出しており、とくに若い父親ほど優しい父であろうと願う傾向が強くみられた。それは、子どもがまだ小さいということのためかもしれない。それに対して、厳格型の人は、「厳しさ」を「尊敬できる父」とイメージづけている事が判る。しかし、これらの父親イメージの中で特に注目されるのは、「何でも相談できる父親」といった項目に対する評価が低い(2〜3%)ことである。これは、各タイプの父親に見られている。この「相談できる父親」という項目のイメージは、父と子のコミュニケーションがどうかであるかを問うていると考えられる。すなわち、親子のつながりを十分に形成しているかどうかを見ることができると示すものである。これらの結果は父親と子どもの対話が少ないことを示すものでもあり、父親の方が精神的なつながりを持つ努力を怠っている結果でもある。

#### 〔4〕父親と子どものコミュニケーション



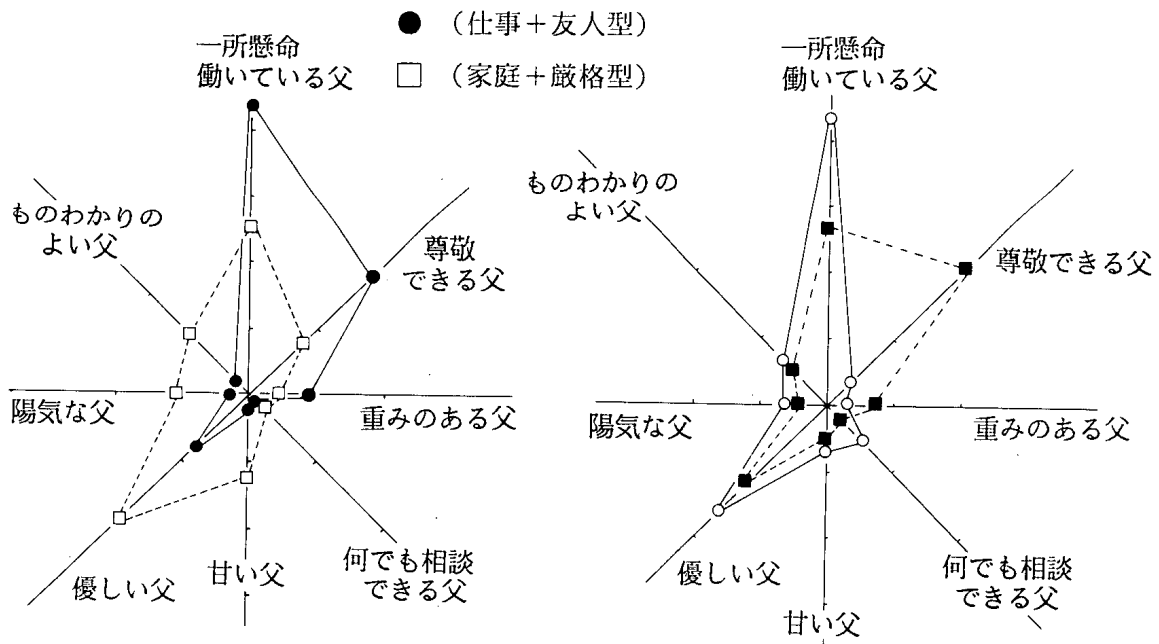


図6 父親が考える「子どもが求める父親のイメージ」の各タイプ

父と子が接触する機会は、それほど多くないのが現状のようである。平日、夕食はあまり一緒にできないが、休日にその分を補っている。子どもと話をする機会がいつもあるとしている父親は、約半数(49%)である。話をする機会が少ない傾向は、権威喪失型の父親ほど強く示される。また、このように子どもと対話をする機会があまりないことについて、大半の父親が「仕事が忙しいから」という理由をまず第一番目にあげ、仕事重視の態度を示している。その次の理由としては、「子どもが話したがらない」「自分の室に入ってしまう」(青年前期)、「説教や説明調になってしまう」(児童期後期、青年期)という解答である。これらの解答は、子どもにとっては、思春期特有の行動傾向の一つでもある。これが対話を持つとする父親との間に壁となっているようである。しかし、この特有の行動を示しやすいからこそ、親と子のコミュニケーションがより大切になって来るのではないだろうか。しかし、現実には「接する機会が持てないから」といった父親の理由になってしまっている。さらに注目される点は、「子どもがテレビを見ているから」対話の機会がないと述べている父親が比較的多いことである。そこで、食事中にテレビを消している家庭をみると全体の5分の1(21%)。ほとんどの家庭において、食事中でさえテレビがついている状態である。このことを子どもの年令別にみたと図7である。それによると、家族同士の重要な対話の場であると考えられる食事中においてさえも、テレビによって親子の

コミュニケーションが阻害されている可能性を示唆しているものと言える。図によると、テレビを見ているために対話ができないという現象は、児童期前期から出現するようである。子どもが大きくなると、家族で話をしているよりも、テレビの方に関心が高くなるといえる。特に日本のテレビ番組を見ていると、夕食時頃に子ども向けのマンガ等が放映されるため、より拍車をかけることになっているのではないだろうか。日本人は食事のマナーが余り上手ではないと言われる。楽しく語り合いながら食事をとるマナーは、幼少期からの家庭で築き上げられる習慣であり、ゆったりとした気持ちで家族間のコミュニケーションの場として使うことが望ましい。

対話の機会を持ちにくい父親が、具体的にとれる対策をみてみると、児童期前半までは、食事、ふろ(40.6%)、共に遊ぶ(37.5%)といったごく基本的なものを通してコミュニケーションをはかろうと考えている。しかし、思春期に入ってくると、食事(28.8%)や遊ぶ(28.8%)以外に、共に外出する(23.4%)といった傾向が多くなる。それは、子どもが大人と同様の行動様式をとれるようになってきたことと関係する。このことは、また、幼少期の時のようなワンパターンでは、子どもの対応がむずかしく、やりにくくなってくることをも示している。子どもとのコミュニケーションが十分にとれていない父親が、子どもの日頃の行動についてどれだけ把握しているかを見たのが図8である。これは権威喪失型と権威維持型について比較し

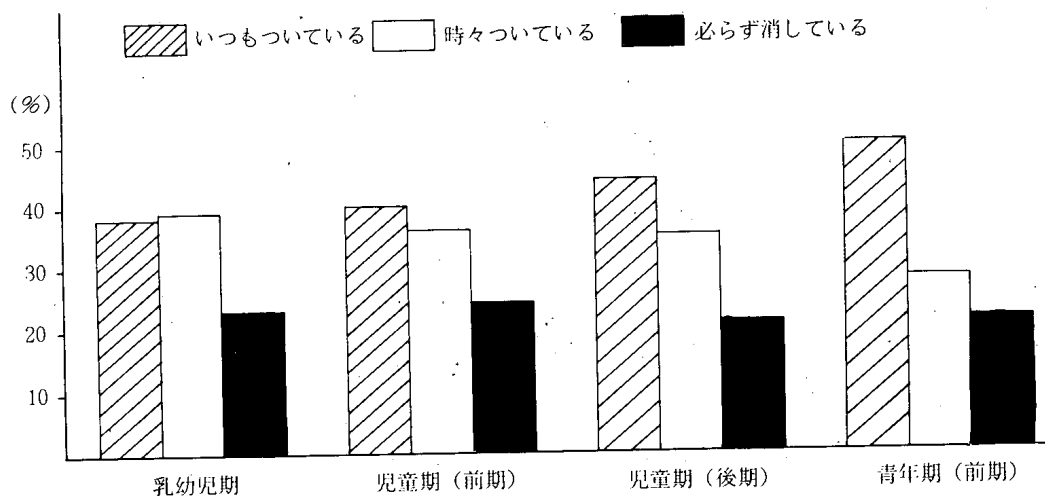


図7 食事中にテレビがついている傾向

た。これによると、維持型の父親は、喪失型に比べて、すべての項目に高い出現率を示している。すなわち、維持型の父親は、子どもの状況をできるだけ捉えるように努力していると考えることが出来る。これに対し、喪失型の父親は、コミュニケーションをとる機会が少ないといった消極的姿勢にもあらわれているように、父親が自ら子どものことを知ろうと努力をしていないことが示された。

しかしながら両者の場合に共通して注目されるのは、「困っていることや、悩んでいること」あるいは「将来の夢について」といった項目に対する情報把握率が非常に低いという点である。特に、権威喪失型ほどの傾向が明確になっている。この事實は、重要な意味を含んでいるといえよう。なぜなら子どもが困っていることや、悩んでいることを父親自身に把握されていないことになるからである。子ども自身が、家庭以外の生活圏で行動していく上でいろいろなでき事に出会うであろう。子ども自身の力で解決できることもあるが、大きく成長しようとすればするほど、より多くの問題をかかえて悩むこともある。そのような時、親がよりよい理解者・相談者として望まれるのは、当然のことであろう。ただし、それは子どもとのコミュニケーションが十分に形成されているといった前提があつてのことである。父親自身が、子どものもっとも重要な悩みごとの情報をつかんでいないとするなら、子どもの相談相手になることはむずかしい。特に父親として権威の喪失を感じている人ほど子どもの相

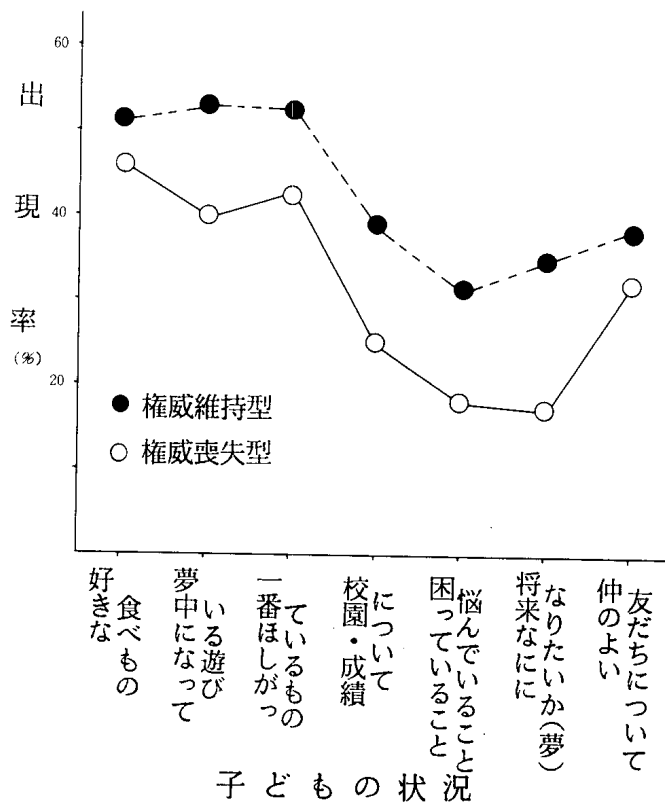


図8 権威維持型と権威喪失型の父親における子どもの状況についての把握傾向

談相手になれないということは、注目される点であろう。もちろん父親自身、子どもとのコミュニケーションを形成するために、対話を求めようと努力するのであるが、子どもが話したり相談したがりないと考えているようだ。その理由を示したのが図9である。それによると子どもが自分に相談しない理由として、①父親はすぐ怒り出す(23.5%)ことを年代や各領域に関係なくあげている。その次に②話す機会がない(21.8%)。これは幼少年期ほど多く示される理由でもある。また③わかってもらえないから(12.8%)も、大きな理由の一つで、成長するにつれて増加する傾向を示している。このような理由がもとで、子どもが困ったことや悩みごとの相談相手として誰を選ぶかとなると、父親は9.7%と非常に少なく、そのかわりに母親が相談相手に十分なってくれると思いで(78.2%)いるようである。すなわち、そこには自分(父親)がやらなくても、母親がやっているから大丈夫という気持ちがあるのかもしれない。この気持ち、子どもの情報の把握(いいかえるならコミュニケーション)を低くすることになっているとも考えることができる。

さらに父親の考えで、注目しなければならぬことは、子どもたちの相談相手として先生(1.2%)や友人(5.0%)を重視していない点である。児童期(前期)以前はともかく後期から青年期にかけては、父親がもっとその重要性を見出す必要があると思われる。特に「先生」にいたっては、ほとんど「ない」

質問項目 タイプ	わかってもらえない	頼りにして いない	すぐおこり出す	うるさがる	話す機会がない	話す話題 がない	はずかしい	無解答
A 仕事+厳格	10%	2	28%	12%	22%	7%	12%	7%
B 仕事+友人	13%	5%	19%	9%	27%	6%	12%	8%
C 家庭+厳格	16%	2	26%	14%	18%	5%	15%	4%
D 家庭+友人	16%	1	23%	8%	22%	5%	18%	7%

図9 父親自身が考えている「子どもが相談しない理由」のタイプ別出現率

に等しい。このことは、現代の教育問題の深刻さを示すものと言える。子どもの生活圏は、日々の成長とともに拡大され、それとともにより広い交流を求め、そのかわりの中で成長してゆくものと考えられる。先生や友人に対する信頼感、その一つの手段であり、ある意味では、心の拠り所でもある。とくに、青年期前期の子どもにとってそれは、両親からの心理的離乳の完成をめざして、ゆれ動く心の支えとなる大切な要素である。父親自身の考えでは、自分が相談相手になれていないため、コミュニケーションがとれていないと感じながらも、その解決策を母親のみにもっていつているところに、大きな問題点が存在しているように思われる。

#### 〔5〕子ども環境としての父親

子どもが自らの力で生活を始め、生活圏を拡大していく時、我々は、どのような環境を子どもたちに提供してやるのが大切であろうか。この問題は、子育てをする上で非常に重要な問題と言える。そこで父親に対して、「子育てはだれが中心か」と聞くと、51.2%が母親であるとし、残りの48.8%が共にやっている」と述べている。このように、半数は父親が子育てを母親にまかせているのが現状のようである。又、「子育てには協力的か」という質問には、74.0%が大なり小なり協力的だと思っているようである。しかし、自信をもって積極的に協力していると言える父親は、その半分の3割ほどである。ただ、父親の権威を維持していると考えている人は、47.1%と高い率を示し

た。

それでは父親が子育てを考える時、我が子の何について心配しているであろうか。幼少期ほど「健康であること」が第一になっている。病気や事故に対するコントロールが十分にできないといった親の気持ちこそさせるのであろう。児童期の前半になると、健康と同率ぐらいに「心の問題」があげられる。幼児時代から児童の時代に入ると、行動範囲も広がり、自分で行動することが求められる。それゆえに、新しい環境でうまく行動できないことも多くなるだろう。親として手伝ってやれないあせりからも、より心配事も増えてくるようである。児童期後半から青年期前半にかけては、将来(進路)の事(21.7%)、学業面の事(19.2%)と、4割近くが学校に関係することになっている。このように親の心配は、子どもの成長に従って変容しており、現実的な対策に毎日せまられているといえる。では、その子どもをとりまく「子ども社会」については、どのように関心がむけられているであろうか。それによると、現在の子ども社会の特殊な現象ともみることが出来る。「いじめ」「いじめられ」について、半数近くの父親が関心を持っている。特に、この項目については、幼少ほど問題意識が強く、乳幼児期では54.2%と半数をこえる。青年期においては32.0%である。なぜ幼少期ほど関心が高いのであろうか。その一つの考えは幼少期ほど自分の力で、「いじめ」に対して対応することができないと判断されるからではないだろうか。父親として考える場

合、青年期ぐらいになれば、「自分の考えでいじめに対応できるし、なんとかなるはず」といった考えがあるのではないかと思われる。しかし父親の考えと裏腹に、現実の社会では年長になるほどいじめの現象がより深刻さを増しているともいわれている。

その他の関心ごとは、権威喪失型では校内暴力(14.7%)維持型ではやる気のなさ(39.4%)をあげている。これらの両者の違いは、前者がその原因を「他人にある」と見やすく、後者は「子ども本人にある」としている点である。子ども社会の現象の一つを取りあげてみても、権威が低下したと感じる人とそうでない人の間には、親の視点が異なっているように思われる。

さらに具体的な子育てについてどのように考えているかをみると、「しつけ」については、乳幼期はほとんどの父親(83.5%)が今すべきであると考えている。それに対して、児童期、青年期といった子を持つ父親になると「そんなに早くする必要がない」と考えているのか、減少の傾向を示している。その中でも青年期の子どもを持つ父親では、子どものしつけを乳幼児にすることに賛成している人は83.7%まで下がる。そしてしつけは、児童期前半でもよいといった意見の割合が高くなり、さらに児童期後半でもよいという意見も増えてくる。その中でも権威喪失型の人は、乳幼児期よりも児童期前半でよいといった考え方を示している。このようにしつけの当事者である父親とそうでない父親との間には、明確な差が示されている。それに

対して文字などに関する早期教育的な問題に関しては、どの領域で比べてみても賛否両論に分かれる。ただ権威維持型の人は、やや賛成傾向を示している。又、日頃子どもに注意することはどのような事かを年齢比較として検討したのが表1である。

表1 発達段階別にみた「父親の子どもに対する注意する内容」の出現傾向

区分 順位	乳幼児期	児童期(前期)	児童期(後期)	青年期(前期)
1	人にあいさつをする。 25.49%	人にあいさつをする。 23.47%	人にあいさつをする。 28.13%	人にあいさつをする。 28.40%
2	いじめないようにする。 12.69%	いじめないようにする。 11.82%	老人・体の不自由な人をいたわる。 15.32%	老人・体の不自由な人をいたわる。 16.25%
3	電車・図書館で迷惑をかけない。 12.17%	老人・体の不自由な人をいたわる。 11.70%	言葉づかいに気をつける。 12.12%	言葉づかいに気をつける。 14.26%
4	老人・体の不自由な人をいたわる。 11.01%	電車・図書館で迷惑をかけない。 11.03%	いじめないようにする。 9.12%	いじめないようにする。 7.62%
5	交通ルールを守る。 10.49%	交通ルールを守る。 10.91%	交通ルールを守る。 8.21%	借りたものを忘れずに返す。 7.39%
6	言葉づかいに気をつける。 9.54%	言葉づかいに気をつける。 9.57%	電車・図書館で迷惑をかけない。 7.89%	電車・図書館で迷惑をかけない。 6.40%
7	道路・公園を汚ごさない。 7.97%	無理に人の列に割こまない。 7.19%	借りたものを忘れずに返す。 5.57%	道路・公園を汚ごさない。 5.91%
8	無理に人の列に割こまない。 5.03%	道路・公園を汚ごさない。 7.01%	道路・公園を汚ごさない。 4.95%	勉強をするように。 5.22%
9	借りたものを忘れずに返す。 4.40%	借りたものを忘れずに返す。 5.12%	勉強をするように。 4.56%	交通ルールを守る。 4.67%
10	勉強をするように。 1.15%	勉強をするように。 2.13%	無理に人の列に割こまない。 4.07%	無理に人の列に割こまない。 3.82%

それによると、まず、「あいさつや言葉づかい」である。これは、青少年調査（国民生活局 1980）でも、青少年が親に注意される傾向とほぼ同じであり、しつけにおいて重要な項目に考えられていると言える。第2位は「弱い子どもをいじめない」で、これは、現在の社会現象の反映と考えることができる。第3位は「老人や体の不自由な人をいたわる」となっている。この項目は、前述の青少年調査では青少年が注意される項目としては、パーセンテージが低いものであるが、今回の調査では、父親たちが比較的高い率に評価していた。またこれらの項目への解答は、児童期後半から青年期にかけて増加する傾向にあるが、それに対し幼少期は、電車や図書館の中で人の迷惑をかけるかといったことに注意する傾向が高くなる。

一方、「小さい子や弱い子をいじめない」といったことに対する注意は、子どもが小さい幼児期ほど高くなる傾向を示し、年が上がるにつれて減少する傾向が見られたのが注目される。その他に父親がかかわれるものにPTA活動が上げられるであろう。それへの参加の意志は、8割近くが積極的でない。その理由としては「忙しいから（81.5%）」をあげている。あるいは、「なんとなく行きたくないから」といったこともあるようだ。また、スポーツ少年団等の意義の認識の度合いについても30%ほどしかなく、消極的な態度が目当てている。このような現象の背景を考える時、積極的な姿勢で子どもの問題に父親が取り組んでいるようには思われぬ。すなわち、子育てに対

して子どもを自ら育てるといった自覚が希薄になっていようにも思われる。やはり、大人の都合といったものが第一に出ているのではないだろうか。

#### 〔6〕子育てに対する母親の評価

子育ては母親がするもの、といいながらも、一方では、子育てに協力的であろうとする父親。子どものかかわり方について、「母親がどのように思っているのか？」を父親自身が自己評価してみた（図10）。それによると、大なり小なり「多分満足していないだろう」と否定的に思っている（83.3%）ことがわかる。しかし、権威維持型の父親は「満足している」と明言している人が、28.9%と、喪失型の人よりも自信を示しているようだ。

しかし、多くの父親が母親との関係でみると、子どもとのかわりにおいて、今のやり方ではよくないと考えている。その理由として、子どもに甘すぎる（25.6%）といったことが、全体的に見られる傾向である（図11）。そして年長になるほど、あるいは権威喪失型ほど、会話が少ないと考え、年少になるに従って共に遊んでやらないことが問題ではないかと考えている。この原因を、子どもに接するタイプである厳格型と友人型で比べてみると、厳しいタイプの父親は、①子どもと遊んでやらない②会話が少ない③子どもにきびしすぎる、をあげる。それに対して友人型は①子どもに甘い②会話が少ない③遊んでやらない、という結果になっている。このような結果をみて判ること



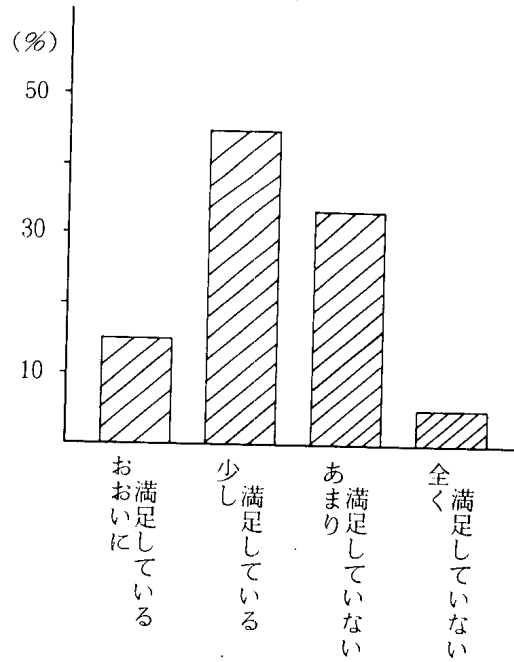


図10 「子どもに対するかかわり方について、母親がどのようにみているか」についての父親の自己評価

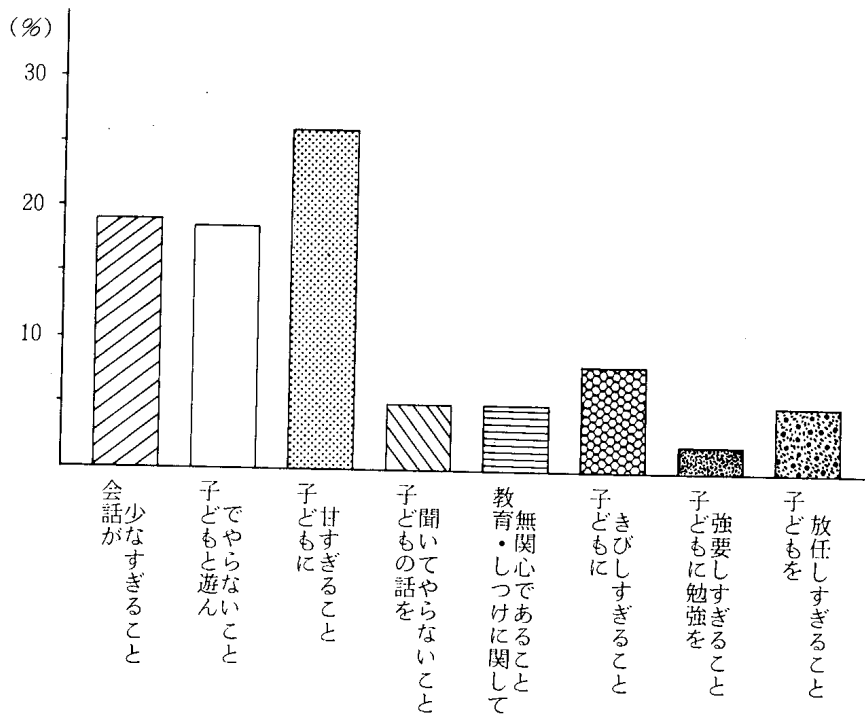


図11 「父親の子育ての仕方に、母親が満足していない」と考える理由の出現傾向

は、子どもとの真のコミュニケーションを形成することができないことが原因となつていとみなすことができる。「会話が少ない」「甘い」「遊んでやらない」と、どれをとり上げても、子どもたちとコミュニケーションが十分にとれていれば問題にならないことも言える。なぜそれができないのかが、父親に与えられた今後の課題と言えるであろう。このことを考えることは、子育てそのもののあり方を考えることにもなると言える。仕事が忙しいとか、母親がするものといった理由づけで解決されるものではないように思われる。

このように見てきた具体的な子育て観であるが、この考えの基(子育ての判断基準)は、何によっているのだろうか。それらの多くは、①両親・祖父母②自分の生いたち・経験等をあげている。この両方で82.3%を占めていることから、子育ての基準は、自分の体験によっていると言える。それ故に、両親の生き方、姿勢といったものが、子どもの人格に大きく影響していると考えられるのである。たとえば、子どもたちの「大人への注文」といった意見を聞くと、よく示されるのが「大人の勝手」という言葉である。この意味は大人の目では、そんなにたいした事ではないと思つてやっていることが、子どもには大きな問題として受け取られていることである。「前に言ったことと、今日言ったことが違う」とか「その時の気分で怒る」とか「子どもがやると怒るくせに大人がしていても平気だ……」といった例があげられる。これらの子どもの不平不満のもとになって

いる「子どもへの対応の仕方」も、実のところ、自分(両親)の体験に基づいた価値基準によつていのである。子育ては、各家族の両親が行なうものであるから、個性と独自性がゆたかにあることが望まれる。ただあまりにも個々の主観に片寄りすぎたり、大人の都合主義でごまかすようなことがあるとするなら、成長過程にある子どもの人格に大きな影響を与えることは明白であろう。

#### 全体考察

今回の調査結果によつて、父親が子育てに対してどの様に考えているか概観することができた。最も特徴的な点は、仕事重視で厳格なスタイルが父親像として描かれた事。子ども社会が自分達の時代に比べて変つてきている事。父親の権威が低下したと考えている事。などがあげられるだろう。

これらの結果をふまえて、父親の権威が低下したと考える人が半数を越えたことの意味について、他の結果と合わせて全体的な流れの中で考察してみたい。深谷(1988)は、子ども達のデータをみるかぎり、①子どもたちは父親を尊敬し、②父親の仕事を理解していると述べ、「子どもから尊敬されている父」である以上、その権威は失墜していないことを示している。しかし、今回の父親自身が示す結果では、そうではなかった。なぜこのような結果になったのか。その背景を考えるために得られたデータを「法的に」示してみたのが、図12である。こ

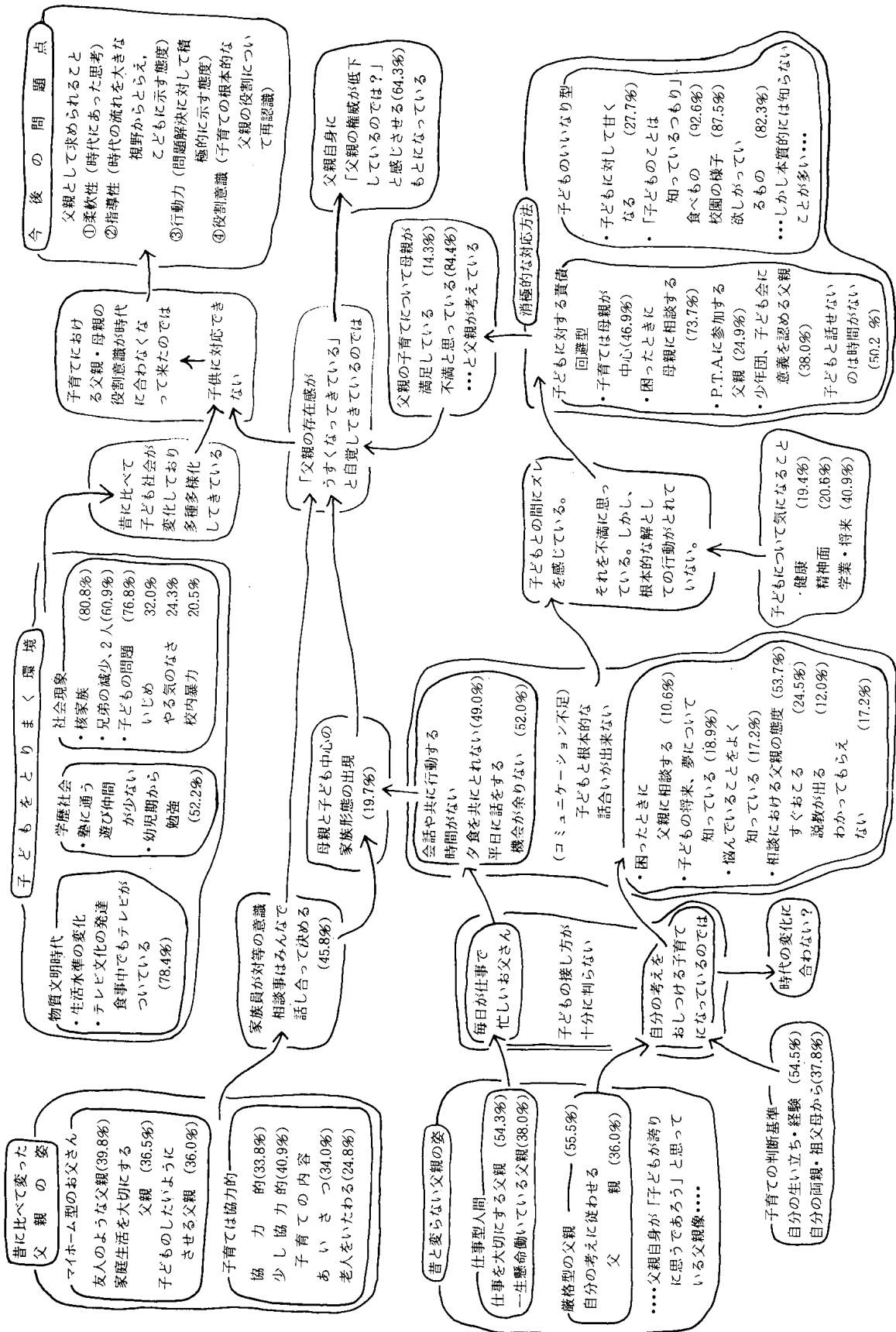


図12 父親の権威が低下したと感じている原因を他のデータに基づいて、KJ法的に予測した結果図

れによると、父親は昔と変わらぬタイプ（仕事型人間）と友人タイプ（マイホーム型）に分かれる。昔と変わらぬタイプの父親の場合、仕事におわれて家庭での物理的時間に不足をきたしている状況が見られる。一面、子どもに対する接し方も厳格で、自分の考えに一方的に従わせる傾向がつよい。このため、子どもから相談しないかぎり、子どもの悩みごとや将来の問題について知らぬことが多い。このような姿を呈する父親像の背景には、自分が小さい時から体験してきた価値観という基準があると思える。もちろんその価値観は、父親自身が幼少期に体験してきた両親ゆずりの価値観である場合が多い。しかし、この価値観は、急速に変化する子ども社会にしばしばズレを生ぜしめるのは自然の成りゆきである。そのことが、父親と子どもとの間での話し合いの障害になっていることが多いようだ。父親自身はそれに十分気付いていながら、根本的な対応となると、どうしても母親まかせになりがちである。また時間がないという理由をあげて問題を回避する姿勢が、解答のなかに目立っている。このような父親としての責任回避的な態度が、結果的に父と子の関係を希薄なものとし、逆に母と子の関係を強めることになっていると言える。ここから、子育てについての父親に対する母親の評価がよくないことを父親自身よく自覚し、しかも父親としての役割を十分に発揮できぬという焦燥感をいだかせられるということが起きている。このような心理的にみて不安定な感情が、家庭内での父親の存在感をたよりないものとし、

その精神的不在感をつよめていると言える。そしてこのことが、父親自身に権威の低下を実感させる要因になっていると考えられる。

以上のような状況は、マイホーム型の父親の場合にも、一面逆の現象として起こっている。戦後の家庭内の民主化的傾向は、物事の決定権についても変化をきたせた。従来概して父親主導型であったのが、家族成員の合議という様相をおび、結果的には構成員の多数の意見が幅をきかせることになる。子どもが幼くないあいだは、父親の権限も十分に発揮することもできよう。しかし、子どもたちが成長してくると、母と子の結びつきが情動的に濃密度を加え、そうした母子関係の強化が、物事の決定権を父親中心主義から母子中心型に自然に移行させることになる。これに、仕事のため家を離れている父親の物理的空白感が拍車をかけることになる。単身赴任というような近來の社会現象のもたらす影響は、母子中心という家族形態を実質的な意味でより強めることになる。父親自身の存在感は、ますます弱くなってくる。

だが、一方において、そうした父親たちは、現代の子ども社会における多様化現象については十分に感じとっており、父親としてそれにどのように対応すべきかとまどっているようである。そのようなとまどいの現象が父親としての精神的な自信の喪失につながり、父親の権威低下に拍車をかけている。しかし相談時に父親が示す姿は、その多くが怒ったり説教するだけと

親の育児観についての基礎的な資料の収集にあった。そしてこの報告は、調査内容についての質的な分析を中心に行なった。量的な分析については、別の機会にゆずりたい。また、今回は父親による「父親像の自己認知」に関する調査であったが、同地区の子どもたちが父親をどのように認知しているかといった調査を、別途実施中である。今後それらの資料と合わせて、総合的に父親像についての検討を進めたいと考えている。

### 要 約

父親と子どもの関係を明らかにするため、今回の調査対象は、乳幼児期から青年前期の子どもを持つ父親178人。35〜45才のサラリーマンで、2〜3人の子どもを持つ核家族が大半である。結果を要約すると、次のようになる。

- 1、父親像としては、仕事重視に傾き、子どもには厳しい姿勢で臨むのが良いと考える者が大勢を占める。
- 2、子どもと遊んだり会話したりする機会が十分にもてなくて、基本的なコミュニケーションに不足している。
- 3、子どもとの間のコミュニケーション不足を心の中に感じているが、具体的な対策がとれず、母親まかせ、責任回避の姿勢が見られる。
- 4、子どもとの接触不足とその対応のまずさから、妻からも自分が評価されていないことを自覚している。またそれが家庭での自分の存在意義を薄くしているのを感じとっており、

父親としての権威の低下を実感している。

- 5、友人タイプの場合でも、家庭内での存在感は弱まっており、父親不在の傾向が進んでいる。

- 6、父親の子育ての基準は、自分の体験や経験に基いている。それが、子ども社会の変化とズレを生じた時にコミュニケーション不足を招いており、父子関係において、父親の柔軟な思考に不足を来たしている。

- 7、今回の調査は、現代の父親像を概観するための基礎的なデータを収集することであった。そのために、質的分析を中心に行なった。今後の課題として、量的分析とともに、子どもの側からみた父親像との比較検討が求められる。

(注1) 本論文の一部は、昭和61年10月、日本教育心理学総会にて発表した。

(注2) この調査における集計結果の数値等の子細なデータに関しては、「父親の子育てに関する調査報告書」(唐崎青少年学区民会議)を参照されたい。

### 引用文献

- (1) 深谷昌志「新しい父親像の出現—調査データを手がかりとして—」『児童心理』37の1(1983), P.182—P.189
- (2) 木田淳子「共働き家庭における父親の育児行動」『滋賀大学教育学部紀要 人文・社会・教育科学30』1980, P.116—

- P.135
- (3) 木田淳子「父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究—共働き家庭を対象に—」『滋賀大学教育学部紀要 人文・社会・教育科学31』1981, P.79—P.97
- (4) 小嶋秀夫「親関係の心理学的分析」『京都大学紀要9』1963, P.125—P.144
- (5) 小嶋秀夫「親子関係把握の方法論」『金沢大学教育学部紀要12』1965, P.165—P.178
- (6) 小嶋秀夫「親の行動インヴェントリー(PBI)の検討—Balanced Scales」『金沢大学教育学部紀要6』1970 a, P.129—P.144
- (7) 小嶋秀夫「親子関係の理解(1)」『児童心理24の9』1970 b, P.164—P.181
- (8) 小嶋秀夫「子どもの成長と父—子の人間関係」『児童心理37の1』1983, P.24—P.34
- (9) 松田道雄『おやじ対子ども』岩波新書、1974, P.91—P.93
- (10) 名越清家「父親の教育的役割に関する実証的研究(I)—中学生に対する意識調査を基軸にして」『福井大学教育学部紀要(教育科学)9』1981, P.17—P.41
- (11) 総理府青少年対策本部『日本の青年・世界青年意識調査(第3回)報告書』1984, P.12—P.15
- (12) 高橋宗「母親の育児態度における多変量解析—母と子のつながりの要因について」『香川短期大学紀要9』1977, P.41—P.62
- (13) 山村賢明『父親の役割と子ども、日本の親・日本の家庭』金子書房、1983, P.141—P.155
- (14) 経済企画庁国民生活局『家庭におけるしつけと教育、日本の家庭—わが国の家庭の現状と今後の課題』1980, P.105—P.111